

琉球大学学術リポジトリ

7.

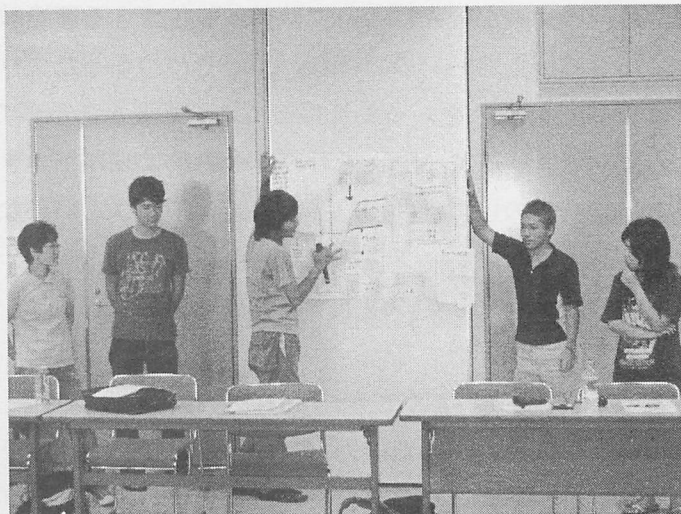
琉球大学教育学部在学生によるプレゼンテーション

メタデータ	言語: 出版者: 島袋純 公開日: 2012-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25062

VII. 琉球大学教育学部在学学生によるプレゼンテーション

島袋：報告書の形で残したいというご希望でしたので、最後まで録音していきたいと思います。では、宇栄原小学校の授業、環境教育とは何かについて、半年間学習しましたその成果を発表していただきたいと思います。右側のグループから発表をお願いします。その場でいいですよ。だれか模造紙を持っていてください。後ろの壁で、見えやすいように、お願いします。

グループ A：私達のグループでは、宇栄原小学校での取り組みの一番中心にあるのが、学校全体が環境活動の拠点になっているということが一番重要というのがあるって、3年生から6年生までは総合の学習時間を使ってやっていて、1、2年生も、3年になったらすんなり入れるように導入みたいな形で環境の授業をやっているっていうのが分かりました。それをつくったのは、キーパーソンの横山校長先生や NPO が独自のプログラムをつくったことで、実践されているっていう



のが読み取れました。その中で、教育目標としてすべての子どもの可能性を育てる。環境教育の中で NPO を活用しながら子どもの可能性を伸ばす。NPO と協働して学校が子ども達を育てていく、というのが教育目標にあり、そのキーパーソンがあらかじめプロセスをしっかりとつけて、基盤として「たんけん、はっけん、ほっとけん」その繰り返しですかね。プロセスをすごい重要視しています。このプロセスがあるからこそ、少しずつできあがっていくものだと言えると思います。そこで、学校教育という場において、教育目標を立て、このプロセス「たんけん、はっけん、ほっとけん」もそうなのですが、PDCA サイクルの中で環境教育のカリキュラムを行うことによって、この環境教育を受けた子ども達がリトルティーチャーという立場から環境教育のことを親に教えていく。親は地域に住んでいる住民の方へ、ということも同じですよ。なので、親から地域に繋がって行って、子どもから親、親から地域へ、環境教育の輪が広がっていくというふうに考えました。教師も環境教育について目覚める。気づきを得て、そこから他校に先生方が環境教育の考え方を普及していくという動きも出てきた、ということが挙げられました。お話の中にもあったと思うのですが、最後に変わるのは教師だ、ということがありましたので。このリトルティーチャーから親、親から地域、地域から最後に教師が目覚めて、その中からまたキーパーソンになっていく人もいるのではないかな、っていうことでここは点線の矢印にしてあります。地域との協力の具体的な例として、旧海軍壕公園の木屑、薪をもらう、ゴミが燃料に、地域との協力になっている、という例が挙げられています。そして、そこからエコと産業は結びついて、エコでエコフレンド号は商売になるかとか、ドイツの条例で企業が出て儲けがあるので、エコがどのように広がっていくか、エコ産業のカテゴリーの疑問点としてエネルギー消費量は家庭が 13.5%、産業が 35.2%。この数字から、産業・企業が環境問題に目を向けることで環

環境教育がまた発展していくようなことにできるのではないのでしょうか、という疑問点が出ております。さっき中心になった学校全体が環境教育の活動の拠点になっているのですが、この学校での環境教育をさらに充実させるためにはどうすればいいのかというのを考えました。出された意見としては、身近なことではNPOが教師の役割をプログラム化してしまえばいいのではないかと、という意見とか、地道な事実を、この宇栄原小学校みたいな事実をつくりあげていくことで、さらに他校に広がって、発展していくのではないかと、大きな視点では、学校教育で環境教育自体を必修化していけば、さらに環境教育自体が充実するのではないかと思います。そのためには、最初の身近な視点については、一般化できる環境教育のティームティーチングプログラムを誰かがつくったらいいのではないかと、そのつくったプログラムをさらに良いものにしていくためには、PDCAのCをしっかりと行っていく必要があるのではないかなと考えました。あと、資金繰りの課題で、学校にNPOを呼ぶと金銭的に課題が大きく、金銭的な課題が出てくるっていうのがあって、その中で疑問に思ったので、横山さんがいなくなったら補助金なんかはどうなるのかとか、フィフティフィティプログラムの余剰金等は、この後どう使われているのか、というのが疑問で挙がりました。以上で、発表を終わります。

島袋：はい。ありがとうございます。最後に、先生方が、気がつくという話でしたが、先生方が、身につけてほしい重要な能力っていうことで、ファシリテーション能力っていうことを横山先生はおっしゃっていましたが、実を言うところの授業もファシリテーションっていうことを最初で意識して僕が言いましたが、今回関係図をつくる時に、誰が上手いファシリテーションをやったかポストイットに書くように言いましたが、書きましたか。それを少し発表してもらえますか。

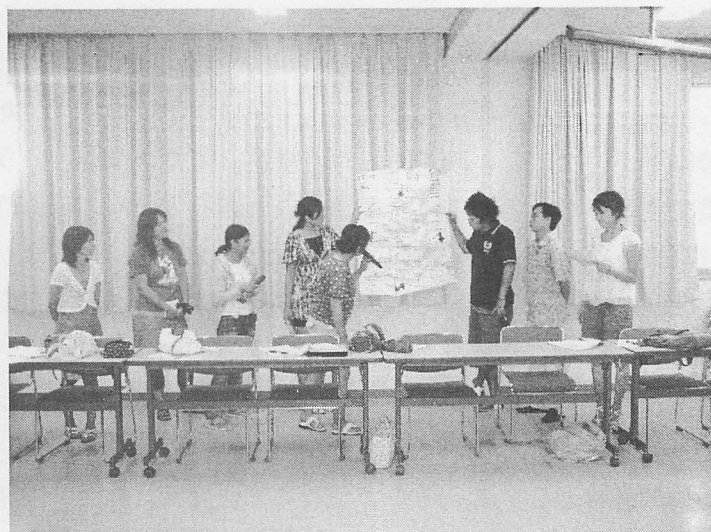
学生：いま、手元にないです。

島袋：覚えているところでないですか。

学生：覚えている部分で発表させていただきます。このワークショップを行うにあたって、ファシリテーターの方を一人選出しました。基本は相互ファシリテーションということで、一人の人が親で話をフリながらその後はフリートークのような形で進めていきました。この結果としてグループの中で一番ファシリテーターとして頑張っていた彼女がいるのですが、その人がやっぱりファシリテーター能力とかそういう面で頑張っていたという意見がありました。そのファシリテーターの方とあと一人いたのですが、すごい場を活性するような意見や引き出すような問題提起とかをしてくれました。今日はこのお二人ともこちらにいらっやっていないので、二人がどういう点を意識して発言をした、とかいうことは分かりません。

島袋：はい、分かりました。他の人、ファシリテーションで、何か言いたいことないですか、この人こんないいこと言ったから非常に助かったとか、具体的にあればお願いします。特にないようですね。どうもありがとうございました。次のグループ発表をお願いします。手で持って、真ん中に集まって発表して下さい。

グループ B : 宇栄原小学校の実践について、今まで話を聞いてきてまとめたものです。まず、宇栄原小学校の教育、環境教育を行うにあたって横山さんは「1000 の子どもに 1000 の可能性」というスローガンを掲げて実践を行っていました。その目標として私達が考えたのは知識の伝達だけではなくて、実際に行動できる実践力を子ども達に養うことと、子どもの意識を変えることでその親や地域も変わっていく。その流れをつくる、ということを目指して



いるなど感じました。次に宇栄原小学校の実践の内容に関する事で、特に宇栄原小学校の環境教育の特徴をいくつか挙げたので紹介すると、一つ目に子どもがすでに持っている知識や発達段階に合わせた段階的な授業づくりっていうのが、私達にとって特に印象に残りました。1年生から6年生まで、1年生と2年生はちょっとずつやって、3年生から本格的に段階的な授業として取り入れるということをやっている、ということが印象に残りました。あと、ワークショップ中心や体験型の授業をやっている、というところが大きな特徴として挙げられます。三つ目は保護者や地域を巻き込んだ取り組みとなっている、というところです。最後に組織として横山さんの強いリーダーシップを感じる、というところが大きな特徴として挙げられます。

もう一つの特徴として NPO との連携の重要さということで、ここに三つ挙げてあるのですが、NPO に総合の時間を教師がまる投げしている状態が、課題で NPO のプログラムに教師の役割を入れ込むということと、これを踏まえて NPO のバックアップが必要不可欠であるという結果になりました。宇栄原小学校の環境教育では6年生で学校版 ISO という実践を行っています。その中で 120 万円の予算削減という成果を出していて、そして学校版 ISO を認証してもらうために教育委員会へアクションをかけたことと、全体を通して子どもの意欲を引き出す内容づくりがされていることが特徴として挙げられます。命の教育というのを 1、2、3年生でやった後に、自分達の生活に関わる生活中心型の環境教育を行っています。そして、買い物ゲームやエコクッキング等、ワークショップ中心でそれによって、子ども間の対話を生み出し、また3年生から6年生まで、その世代に受け入れやすいテーマを選択していて、上辺だけの理解に留まらないように工夫されていました。僕は宇栄原小学校のそういう環境教育の成果について説明したいと思います。リトルティーチャーの育成のために、その計画ができました。目的は子どもに主体性を持たせる、自ら行動できるような教育。子どもを中心として子どもから家庭へ、最後地域までに広がっていくと思います。それを、最後は地域の恵みで子どもに影響を与えていきます。子どもからも地域へそういう影響が広がっていきました。宇栄原小学校の、こういうふうの特徴と成果があるのですが、そこから課題も生まれてきていて、こういう成果が出ているにも関わらず他の学校に広まっていけないとか、あと環境教育のプログラム冊子っていうのが小・中・高であるにも関わらず、各学校で使われることが少ない、使われていないのが現状。学校内で環境教育に対する教師の意識の温度差とか、そういうものが課題として出てきて、何故こういうふうな課題が出てくるかっ

ていうと、環境教育が制度化されていないから、っていう意見が出ました。スウェーデン等のように義務化・必修化されていないからという意見が出ました。さっき特徴の時にも述べたのですが、こう段階を踏んだ体系的な授業、宇栄原小学校の特徴であるこういう授業をするには、やっぱり後継者がいないと、段階的に長く継続してできないというので、私達の班では宇栄原小学校の最重要課題が指導者の継承、後継者の問題っていうふうに位置づけました。それを踏まえて僕達が解決策をいろいろ考えていこうとしたのですが、やっぱり制度化されていないっていうのは大きな問題であって、義務化してでも学校に強制力のある程度もたせる必要が、結局あるのではないかという結論に至りました。そしてもう一つは、NPO が教師の役割をプログラム化してあるのですけれども、教師がもっともっと環境教育に対してとつき易くしてあげるといってその環境づくりも併せて行っていくべきではないか、となりました。そして、具体的な案の中で環境教育を一つの教科として考えるのではなくて、理科、社会、国語、家庭科のような一般的な教科の中で環境の意識を高めるために、教科の中にも環境についてのトピックスをもっと挙げていくことが、挙げていくことで子ども達の中でも常日頃から環境に対する意識を高めるきっかけにもなるし、先生達もそのようなことを理解する上で重要になってくるのではないかと、となりました。それで、この成果の中でリトルティーチャーというキーワードがあったのですけれども、それもやはり解決策に繋がっていくのではないかと考えて、リトルティーチャーが増えていくことが、将来的にこの最重要課題でもある環境教育を継続していく、その動きをどんどん広げていく、その中でリトルティーチャーが増えて、将来的に彼らとその役割を担ってくれる。その土台づくりが今とっても重要なのではないかと、となりました。以上です。

島袋：ではこちらも同じように、この新しい指導者は、ファシリテーション能力が必要だということで、自分達でワークショップをやった中でファシリテーションはどうでしたか。もし具体的に誰がどういうことを言ったので自分は助かった、みたいな話があればお願いします。

学生 C：これをやった時のファシリテーションが知花さんだったのですが、知花さんが進めてあとはフリートalkingでした。〇〇君が「こういうところが問題じゃない？」とか言ってそれを自分がまとめて、またいろんな人がそれに対して問題提起して、まとめていくっていう形で仕上がりました。

島袋：他に、誰かのファシリテーションで、良かったというものがありますか。

学生 D：こういう話し合いをしていると、なかなか時間とかの問題もあるし、こう一回「ここはこうだよ」みたいな結論的な雰囲気が出て先に進んじゃうと、もう何かぶり返すことってすごく何か悪いのかな、みたいなそういう雰囲気があると思うのですが、そこをこう湊さんが「いや、ここはもう一回考えてみようよ」みたいな、そういう発言を何度かしてくれて、そこで新しいことが、やっぱりそうか、みたいなとか。みんながあんまり納得できてないところが全部埋まるような、パズルとして埋まるような形になったっていうのが自分の印象でした。

島袋：いいですね。どうもありがとうございました。今までのゲストスピーカーの話の中から、

宇栄原小学校の環境教育とはどういうものであるか、ということについて発表してもらいました。次は、研究スタッフからのコメントです。最初に大宜味さんに話してもらいたいのですが、皆さんがやはり気にしている学校の先生方の関わりについて、先週、私と大宜見さんと島袋君の三人で3年、4年、6年の先生方に話を聞くことができました。その時の話と、今日のプレゼンテーション、ゲストスピーカーに対するコメントでもいいですので、6、7分ぐらいでお願いします。

大宜見: 大宜見洋文です。よろしく申し上げます。とりあえず、先週の件からです。各学年一人、主任の先生が去年からの掛け持ちで取り組む、一年目の取り組みを二年目で改善したりするような形で、三年目かな、今度は、あたっていましたけれども、実際二年目の取り組みはこれからってということで、実際の変えられたかどうかというのは、まだ見切れてなかったのですが、先生達の雰囲気を見て、子ども達が確かに変わっていると。自分達から積極的に環境教育、何て言うのかなあ、雨が降ったら牛乳パックを外に出して具体的な活動をしていると、新しく来た先生達もこれに驚いていたと。意識は変わっているという話でした。ただ、だからといって、前回のこちらであったシンポジウムで辺土名高校の安座間先生がおっしゃっていたのですが、この教育をしたからといって社会が本当にこれを必要としているかどうかというの、実際先生達も、あんまり分からないような話が印象にあります。二年目になる、3年生の鹿谷先生達のプログラムを去年も11月にやったということでした。僕らが行った時は5月で、この時期が一番いいよ、ということだったのですが、今年も11月にやるということでした。勉強した動物も生物もいなくて、子ども達が「いないよー」って文句を言っている。それに関しての反省が、やっぱりなかなか難しい、この時期にできないということを課題にはしているのですが、解決もできてない。NPOのプログラムに先生達を取り組むという話で、先生達も授業の一環としてこのプログラムを進めたいということでした。単発で終わるとどうしても子ども達が、打ち上げ花火みたいに終わってしまうので、自分達の教育過程の中でこのプログラムを活かしたいので、そのプログラムに入る前に、自分達で気づかせるような前処理をして、そのプログラムに入っていくということをしていました。それができたら、一年間のプログラムで、NPOのプログラムを活かせる。ただし、これは二年目に入ったからできることで、例えば3年生の先生が次の年4年に行く場合に、全く取り組みが違ふと。それで、またゼロからのスタートになってしまうようです。学年間の先生達の交流がないってということが、次の年に繋がらない感じがしました。そこら辺がもしかしたら校長が異動になった時にどうなるかっていう話にも繋がってくるんじゃないかと思います。

島袋: ゲストスピーカーの発表、報告、全体の印象などについてもお願いします。

大宜見: 今回の発表を聞いて、宇栄原小学校の先生達にもこの発表を聞いてもらったほうがいいと思いました。というのは先生達もなんか漠然としているような感じがするので。だからこういうのを一回消化してやると、自分達がやっていることがこういうふうになるのだ、と気づくのではないかな、今は漠然としていると思いますね。そういう感じに見えました。

島袋: 今のプレゼンテーションで、大宜見さんも漠然としていた部分はかなり明白になってきたということですね。では、前城充さん、何でもいいので、コメントをお願いします。

前城：あちらの班が発表した中で最後のほうに出てきたプログラムが、最初の講義の時に使った小・中・高のプログラムのことを言っていたのですね。県が作成したものが使われていない、という内容でしたね。広まっていないという課題も出していましたね。その二つは何故かという、環境教育が制度化されていない、という結論に達していましたよね。僕もここは注目していました。宇栄原小学校が取り組んでいる授業は総合学習ですね。正規の授業、教科に入れる必要があるのではないか、っていう発表もされていました。ここがやっぱり重要なポイントだと私も思いました。私は教育行政の中で総合計画つくってきた関係上、やはり計画策定というのはすごく重要だと思います。各自治体は総合計画っていうのをつくっている、その総合計画の中にこの環境教育っていうのを議論して、落とし込んで、言葉で書き込んでいるかどうかっていうのは、とても重要な点だと思います。環境教育っていうのは先ほどこちらの班からもありましたが、フィフティフィフティの話が出てきました。フィフティフィフティは学校の光熱費を落として経費を削減するという魅力があるのですが、これは、捉え方を間違えると金額を下げることに目がいって、本当の環境教育ってところを見落としがちになるかもしれない。ですから、住んでいる各自治体、学校も含めた自治体が、今の自分達の住んでいる社会をどうしたいのか。先ほどは持続可能な社会っていうのが出てきましたが、じゃあその持続可能な社会にするためにはどうすればいいのか。そしてそれを担う子ども達、将来の大人達をどう育てたいのか、というのをしっかり議論して、最上位の計画に言葉として落とし込んでおく必要が絶対にあると思います。宇栄原小学校は那覇市のなかの一つの学校です。その学校がこれから上手くまわって、他の学校にも伝播していくっていうのは、これは総合計画の次の教育委員会の教育計画、一番大きいのは総合計画ですがその次に教育計画っていうのがありますよね。教育委員会がつくる計画。ここにも落とし込んでないといけません。それで初めて学校のほうにいくかなあと、この体系づけがとっても大事だと思うんです。言葉に書くと、どういう状態にありたいかという、持続可能な社会というのは、今は達成できてないけど10年後にはこんな社会にしたい。こんな社会になるにはどんな指標で表していいか。子どももそう。子ども達も今は気づいてないかもしれないけど、こんな大人になってほしい。こんな大人になるには、こんな目標値が必要だねっていうのを出していくと、この目標値に向かっているような展開が考えられるので、みんなの共通のベクトルができる。そうすると教育はどんな方法が必要だね、っていう議論が深まる。こんな議論をしていって、その議論の中で、じゃあ教科の中の、いま文科相が定めている教科書のプログラムの中の理科とか社会だったら、この部分は環境のこんなプログラムが入れられるね、ってことを教育プログラムとしてつukれないか、こういうのがつukれて、正規の授業で南風原町だったら南風原町の子ども達は育てましようね。教科であれば、評価が必ずついてきます。でも総合学習には評価はないですよ。明確な評価は教科にあるので、そこら辺の落とし込みが必要じゃないかな、って思ったりしました。その環境プログラムの作成がたぶん必要で、その環境プログラムを作成する、作成してそれを教育委員会で方針を決定してちゃんと整える、というところが今回のいろんな方々の授業を見てきて、話も聞いて、私を感じたところです。こういうのが整ってくると、今度は個別の教師のやはり環境教育課程でのプログラムっていう、先生を育てるプログラムまで発展していくのではないかなと思います。そうすると、こういうプログラムができると各学校も共通の考え方で一緒にやっていけるし、そういうプログラムが学校で展開されると今度は学校を中心として、今

度は地域社会の PTA、社会教育団体、NPO などが繋がっていく。ここはまた、社会教育主事の出番なのです。こんないろんな仕組みの中で社会を構築していくと、これは上手くいく可能性はあるな、っていうのを今回の講義や実践でいろんなところを見ながら自分の中で整理ができました。以上です。

島袋：はい、ありがとうございます。南風原町で具体的にやっていくという意味ですね。南風原町の自治会長の 大宜見さんは、南風原町ではこういう方向でいくと、いいですね。みなさん移住して、子どもを産んで育てる時は南風原町でお願いします。次に南風原町とちょっとだけ関係のある新田さん、今回の発表のコメント、あるいはゲストスピーカーの報告に対するコメントをお願いします。

新田：はい、新田です。大宜見さん、前城さんの話を聞いた中では、自分の中では、あーこうだな、こうなって分かったのですが、今喋ろうとしたら喋れないので自分が感じたところだけサクッと話したいと思います。たぶん環境教育だけの問題ではなくて、いま、社会が抱えているいろんな問題に、子ども達もそうですし、大人も教師も何かに気づいた時に、たぶん気づくのはけっこういろんな人が気づくと思うのですが、気づいた次のアクション、気づいたことに対する、個々の自ら考えて行動するっていう、このアクションが非常にこうファシリテーション能力とか、地域再生とかっていうところに、大きなポイントになってくるのかなという気が、この 4 月から 8 月までにかけての前期で感じています。先ほどこちらのグループでも「自ら考え」っていうキーワードが出ていましたし、私もさっき島袋先生から南風原とちょっとだけ関係があるって言ったのは、この前城さん、大宜見さん、長田さんと一緒に、総合計画の策定に関わっていたので、その策定の中でもやっぱり同じように自ら考え行動するっていうことが重要なポイントに、出てきていました。もう一点は、情報の共有というところで、気づいた人間同士が繋がっていく、連鎖していくっていう、こっちのグループの中で、こう子どもが気づいて、大人が気づいて、地域が気づいて、教師が気づくっていう、そういう連鎖も非常に重要なのかなという気がしました。最後に、こちらのグループでプログラムを誰かがつくるっていう話があったと思うのですが、別に環境教育コースだけではなくて、自分達でつくればいいのかないかなあ。気づいた人が何かアクションを起こしていけば、こう変わっていくのかなという気がしました。以上です。

島袋：はい、どうもありがとうございました。二つのグループのプレゼンテーション、それと全体的な話、研究スタッフからの指摘について、鹿谷さんコメントをお願いします。

鹿谷（法）：こんにちは。私、鹿谷の連れ合いの鹿谷法一です。琉大海洋学科で 5 年前まで、蟹とか海の生き物を教えていました。今は辞めてプラプラしていて、一昨日ぐらいから、南城市の教育委員会のほうに臨時で入っています。理科支援委員等配置事業っていう、理科の先生のお手伝いをする人のお手伝いっていう非常に離れたところにいます。その関係でこういうところに興味があって、今日参加させていただきました。今のお話、発表を聞いてっていうことだったんですけど、こっちのグループ、最初のグループちょっと時間が無かったみたいで、ちょっと上手くなかったかなと思っていたんですけども。こちらのグループはその分聞いていて、けっこう頑

張って発言したなという感じでした。その中でちょっと気になったのは、怖いなど思ったんですけど、ここから先はちょっとブレインストーミングだと思って聞いて下さい。先ほども誰かがプログラムをつくってやっただらいいという話で、そんなの自分らでつくったらいいじゃん、っていう指摘がありました。全くその通りだと思います。しかも制度化しないとできない、制度化してもらわないとできないわ、っていうのもちょっと怖いなど。後継者がいないのは横山先生のせいだ、っていう感じもちょっと受けたのも、これもちょっと間違いではないかと。自分がなればいいと、いうわけですね。あるいは行政がやればいい、っていうのも何か他人任せな気がします。学校に強制力を持たせるって、強制力を持った学校に君ら行きたい？ NPO が環境づくりをするとかって、教師のために、先生のサポートのために NPO 頑張るって、それとも、学生を置き去りにして先生を助けてあげるっていうのは本当の教育なのか、話を聞いてそんな感じを受けました。それから今我々は人間です。これ生き物です。人間にとって環境っていうのは何でしょう。普通、カエルとかトンボにとって環境っていうのは、空だったり水だったり空気だったり食べ物だったりっていうのが環境ですけど、我々にとって環境っていうのは、一番重要な環境は、社会ですよ。人間にとっての環境教育っていうのは社会科だと僕は思うんですね。経済が、例えば環境が儲かるものだと思えば、環境教育しなくても環境のエコものは、グッズは売れて、ちゃんと環境が上手くなるように動くだろうと。だから、理科の先生が頑張らなきゃいけないとか、理科を、科学を進めないと環境が良くなるってというのは大きな間違いだと。なんか、そういう感じが今受けました。だから、我々は自然を教育して、自然が上手くいくようにエコを考える環境教育をしなさいというのではなくて、人という社会の環境を上手く動かすことによって、自然環境をぶっ壊している人間を上手く環境教育していく。そういう意味では社会を上手く動かさないと、社会科ですね。誰か言っていましたけど、そういう動かし方っていうのは上手くもっていかないといけないのかな。もっと奥、今気がついたとこの裏にある問題点っていうのをよく考えないと他人任せになってしまって、上手く動かないかなと思いました。これはみなさんが言ったことをまるで全部反対を言ってみたので、わざと今反対言っていますけど、それを自分に対してどう反論するのか、そこでもうちょっと考えてもらえればおもしろいかなと思います。今の発表を聞いた感想です。

島袋：はい、どうもありがとうございます。続いて、鹿谷さん、お願いします。

鹿谷（麻）：鹿谷麻夕と申します。宇栄原小学校で、3回ぐらいかな、一年一回きりの海のガイドを、ウチと藤井さんと一緒に頼まれてやっています。やっぱり一番やって感じたのは結局横山先生から「何日に観察会お願いします」って頼まれてやりに行くと、いつもそれっきりだったんですよ。それを後から横山さんにも直接言っているのですが、やっぱり事前・事後の繋がりがどうなっているのか、学校の中で観察会をどういう位置づけでしているのかっていう情報までが、なかなか私達のほうに直接伝わってこない。だから、現場の3年生の先生方と直接話をする機会が実はほとんどなくて、無いまま当日行っちゃって、っていう感じだったですね。その辺はお互いに連携する努力をもう少ししないといけないな、ということはずっと感じています。今年は是非そういう打ち合わせの時間を持って下さい、というようなお願いをしています。先ほど、その海の観察の時期が悪かったっていう話があって、最初に、非常に悪かったですね。あれは秋に入

ってからお願いをされちゃったので、海の潮っていうのは春・夏は昼間に潮が引く、秋・冬は夜に潮が引く、昼間はあんまり引かないですね。だから海の観察会で、昼間干潟を歩こうとしたら春か夏しかいい状態ではできないですよ。そういう状況っていうのは、一般の方はあんまりよく知らないなので、何も考えなくて、秋や冬、授業の都合のいい時間に、最初観察会をやるって言われて、やらざるを得なくて多少水が深くてもしょろがないね、見られる所まで行こうか、っていう感じで、やりましたけど。次の年に、先生方に対して研修をしてほしいというふうに頼まれて、夏休みの時間を使って一日先生向けに同じ大嶺海岸で観察会をやった時に、けっこう資料も私は作って、自然っていうのは人間の思い通りにはなってくれないので、海の観察会をする時には、こういう潮に気をつけて、こういう時間にこういうことに気をつけて、計画を組み立ててやって下さいよと。それから、事前学習とかも必要ですよという話を、実は全部資料を作って先生方に配ってあるのですが、あんまり役に立ってないかなというのと。実際にはそこまで先生方がそういうのを活用して、ご自分で勉強されて組み立てるっていうのは、まだちょっとしんどいかなとは思いますが、その辺の使い方も、まだまだ大変かなとは思っていますが、今年どういうふうに改善されるか、今年も最初10月に観察会って言われたのですが、やっぱり日と潮があんまり良くないのでいろいろ調整をして、9月の下旬ぐらいに今年はやろうかなという話になっています。今年はどうなるかっていうのは私も楽しみにしているところです。みなさんの発表を聞いて一通りの問題点っていうのは出てきているかなと思いました。隣でごちゃごちゃ言っていたみたいに、さらにみなさんが出した問題はだいたいみんな気がつくところだと思うんですが、そこで留まっているという印象も正直ありますので、もう一歩二歩突っ込んで、それから自分達は具体的にじゃあどう動けるのかな、というところまで考えてもらえたらいいかなと思います。

島袋：はい、どうもありがとうございました。アースの会の宮良さんお願いします。

宮良：こんばんは。私は4年目になります。最初は4年生の、環境学習をお手伝いして、次5年生、次に5年生、今年が5年生っていうことで、1、2、3、4年目に、環境教育のお手伝いをしています、アースの会の宮良といいます。急いで来たのでみなさんの発表は聞いているだけで、頭の中に全然ちょっと入ってないで、模造紙を読んでみて、そうだなそうだなって、こんなことも言ったなとか、あと他の方もこんなふうに言ったのだろうな、っていうことで本当に今おっしゃったように、それぞれの問題がちゃんと書かれていて、自分もちょっと勉強し直したなっていうことで、素晴らしいと思います。それで私は自分のことを言わせていただくのですが、今回、お話をする機会をいただいて、自分が考えるきっかけをいただきました。もう4年もやっていますので、すごくいろいろ悩みました。このまま続けていいのか、先生との間も上手くいってないみたいなのところ。それで、問題点は2つですが、一つは、自分達はどこまで踏み込んでやっていいのか。「環境教育」って、教育なのか、私達は取り組みの手伝いなのか、どうしようかなと思いました。私達が結局目指すのは教育ではなくて、もちろん教育っていうのは何でやらなきゃいけないということを伝え、教えるということも教育なのですが、私達アースの会が目指すのは何か生活の中で取り組んでほしいっていうこと、それを根づけばいいかなって思っています。この前お話をさせていただいて、最終的にこれ気づきました。だから、教育っていう言葉じゃなくて、環境をするための取り組みのお手伝いっていう程度に留まったほうがいいのかな、って

うのが一つ、こちらでお話をして考えたことです。二つ目は、どこまで踏み込もうかなっていうところで、やっぱり先生達ってというのはどうしても一年間でおしまいなのですよね。仲良くなったらまた次の年で全然違う先生になりますので、それで先生と生徒の間の信頼関係、あるかどうか分かりませんが、こう中の間に私達の第三者が入ってきて、どんどん踏み込んでいって、生徒と先生との間に「これしましょう。あれしましょう。」って言ういいのかなっていう、そこもすごく悩んでいるところです。結果的に今年は先生と生徒の間にはあまり踏み込まないで、ある程度の中まで入って行って、できるところまではお手伝い。だけど、何をやるかっていうのは先生と生徒で決めて下さいと、そのお手伝いはしましょう、っていうことに今年はしました。やっぱり学校の中ってというのは、先生と生徒の信頼関係の中にあるので、あまり第三者が入って、ヒッチャカメッチャカするのも何かな、ということで。今年はそういうふうな感じでやっていこうかな、っていうふうに思いました。

島袋：はい、どうもありがとうございました。引き続きまして、6年担当の沖縄県地域環境温暖化防止活動センターの長田さんをお願いします。

長田：何話そうかな。なんかボーっと聞いていたのですが、鹿谷さんが反対のことを言うことでまとめてくれたと思うのですがその件で、たぶん総合は総合でいいところがあって、教科は教科でいいところあるのですが、そこをどういうふうに関連づけることができるのかってというのが一点と、あと制度化という、やっぱり教科にない、教科と制度化っていうのは限りなく近いとは思いますが、その教科にどうやってするのか、例えば一人のスーパーマンがいてできるのと、スーパーマン無しでできるのと何が、その両方とも何ていうのかな、プラスマイナスがあると思うんですがスーパーマンの、言ってみれば一つの独裁者であってそれでできるところもあるけども、そうでなく制度的に鹿谷さんが言ったようにそのネガティブなところもあるけども、制度的にやっていくと初めての人でもやっていけるという、そのバランスをどうとるか、そこを教科と総合でどうとるか、というところがあるのかな、というふうにかう薄らボンヤリと感じました。総合の時間ってというのは環境に限らずいろんなことをやっているのですが、総合は、良い効果が出ている学校もあるみたいなのですね。これは僕の同僚の知り合いがやっぱり高校の先生をやっていて、去年度かな、総合の時間を小・中学校で学んできた人達が高校に入ってくると、明らかに趣向性というか、その何て言うのかな、その人達の、ちょっと何て表現していいかわからないのですが、そこが違うらしいのですよ。総合を学んできた人達は、棒暗記は苦手だけど、やはりその条件を揃えてどういうふうにしたら問題解決ができるかっていう、そういう思考法はかなりトレーニングされているってことは実感している、というふうな話を聞いています。それはやっぱり総合の優れた面で、やはり問題解決は環境学習とはとても密接になってくると思うので、その問題解決をするためには教科では不十分だとか、特に日本の教科ではというふうに言ったほうがいいと思うのですが、不十分なところがあって、そこはやはり総合的のような枠組みとの連携が必要なのだろうな、というふうには思っています。だけど、総合でやるにはやはり一人のスーパーマンが、スーパーマンというか一人の率先するリーダーが必要です。そのネガティブなところもあるし、制度的にやるとそれは自然と転がっていくでしょうけれども、窮屈になっていくところにネガティブなものがある、その中でどういうふう折り合いをつけて本当

の意味での、僕はやっぱり教育の効果は取り組みができて分かるものだと思うので、教育か取り組みか、の二者択一ではないと思うんですね。取り組みがいつ始まるかっていう問題はあると思うんですが、そののところ実際に行動に起こしてナンボのものだと思うので、それはやはりそのうまい具合の連携をどう組み立てていくか、関わりがあるのかな、っていうふうに思いました。具体的にそれをどうするかって言ったら、なかなか難しいところがあるので、やれるところ、できるところでやっていくしかないなという、火事場泥棒的に何処で家事が起こるか探してですね、火事になったところでもうちょっと火つけるよ、というふうなお手伝いをして、ということをする。そこら辺は何て言うかな、けっこう冷淡とか冷静に僕は踏まえていると思うんですよ。ここでやりたいと思っても、いろんな面で条件が揃っていないとできないわけですから、そうすると条件は揃っている所で、それこそ潜り込んで行ってそこでお手伝いをして、それがバーっと大火災になればしめたものだけでも、ボヤで終わってしまったらまた次の火種が何処から見えるかな、っていう。当分はその、イタチごっこじゃないけども、そういうことをやっていくしかないのかな、と思っています。そのバックアップを中間支援的な立場でやるのが、自分達だというふうに立場も決めていますので、それでやっていくしかないなと思っています。ですから、宮良さんみたいに、僕は個人的には真面目に悩むこともないですし、こんなもんだろうなという感じでやっていくしかないかな、というふうに極めてフアジーでいい加減に考えています。

島袋：どうもありがとうございました。金城朗子さんちょっと遅れて来られたんですけども、事前に資料とか送ってありますので、今日遅くれて学生のプレゼンを聞けなかったんですが、ゲストスピーカーの報告でもいいですし、報告を読んでの感想でもいいのであればお願いします。

金城：どうも、幽霊サポーターで久々に来た上に遅れて来まして、すみません。今までの資料は読ませていただいて、おそらく問題点の中にも出てきたのかなと思うんですけども、どんなふうに仕組んだことを継続していくか、っていうことは私も、仕組むほうに今いるものですから、どう仕組んだらそこで根づいて育ってくれるかな、っていうのは非常に今課題で。今の話にもあったように火が起きているところを探して、それを大火事にするっていう案はなるほどなあと思って聞いていました。できれば先生達が育って火種を起こしていただいて、サポーターである私達がそれを支えていけたらいいなと思った次第です。

島袋：はい、分かりました。どうもありがとうございます。最後に私がプリントで、メモでいくつか、何ページかまとめましたので、言おうと思っていたことは、さっき鹿谷さんに全部言われてしまいまして、まいったなと思いながら。ほとんどですね、言われてしまったのですが、環境教育が今必要な理由っていうことを私なりに何故今環境教育が必要なのかについてお話したいと思います。これまでの人間の社会システムそのものが非循環的で環境への負荷が非常に大きくて、そうした負荷を与えていることの、自分達が生活するだけで、負荷を与えるっていうことの自覚と意識の転換が必要であるということ。それから、環境と共存できる社会システム、持続可能な社会ってことで横山さんが何回もおっしゃっていましたが、それへと創り直していく必要性。それに気づき、そして今の社会に対する、批判的思考力。これは、代替的なオルタナティブな社会をイメージできる力、これが非常に必要だと思いました。社会科そのものではないかとおっしゃ

っていたのですが、社会科はどうも、既存の社会制度の知識を伝達するだけの科目になってしまっているような気がします。さらに重要なのは、そういった新しい社会を創り直していく主体の育成。主体者意識の醸成と社会に、実際に働きかける実践力の習得の必要性。これが問題意識として共有されていたのではないかと思いました。特に、この部分は、社会への働きかけの力ってということで、これは社会科の先生の中でもこういった力を意識して教育するって人はほとんどいないですよ。大学に行っても別にいないですよ。社会科の科目自体がこういったことをターゲットとしていないって部分がありまして、非常に大きな問題ではないかなと思います。こういったいろいろな報告からの私の分析、見解で出てきた四点ですが、県の環境政策課が出してきた環境教育の目標と非常に似ています。それは、1が環境に親しむ、2が環境の仕組みを学ぶ、3が環境保全・創造する、という三つになっているのですが、これが宇栄原小学校の中では3年生、1、2年生もちょっと。それから4年生、5年生が環境の仕組みを学ぶ。特に環境の仕組みって言うても、自然環境よりも社会のシステムそのものですよね。環境に負荷を与えるゴミの問題ですとか、あるいは食物、それをどう我々は調達し、そして排泄しているか。この問題を取り扱っているわけですよ。そして3番目に環境を保全・創造するって、これはもったいない運動をしているんですが、より良い環境創造のための主体的で、実践的な行動を育む。これ県のホームページにも載っていて、パンフレットにも多用されていますが、すなわち実践できる主体の育成ですね。こういったことを書いていて、かなりこれと類似した目標設定になっている、ということが分かるかと思います。問題は、環境教育のプログラム自体を、4ページちょっと見ていただきたいんですが（目次Ⅷの図1）、全体像ではですね、1、2年生が自然環境に親しむ。特に自然に親しむ。それから4年生から環境に負荷を与える仕組みを知る。そして、6年生から環境保全・創造する、という形になっています。4年生がゴミ、5年生が食物。そういった形かなとは思いますが、これが、ナナメ、右下に下りていっているという形で、3年、4年、5年っていう。実際には教科の中から出発点として、3年生は、1学期に生物を学ぶ。生物っていう、特に虫らしいのですが、そこから引っ張ってきている。虫の学習、あるいは自然の仕組みを知るっていうのは、4、5、6年、中学、高校ってずっと続くわけですよ。ですから、実際には中学校に行ってもこれから真下に、環境に負荷を与える仕組みを知る、それから環境の保全、創造する力を身につける。これが、何回も何回も循環、往復しながら本当は環境教育っていうのは進んでいくべきではないかなと思います。理科、それから社会科、家庭科そういったものを横断的に何回何回も繰り返しながら環境教育っていうのは進んでいくべきだろう、という気がしています。だから全体的なプログラムの中で、環境教育そのものを再考していくっていうことが必要。ただ、問題は、県庁の話聞いていても、学校の年次教育計画もこれを意識して、年次計画をつくる学校なんて本当にあるのかな、たぶんないだろうと。辺土名の校長先生の話聞いてもほとんどあり得ないということをおっしゃっていました。安座真教頭先生の話聞いて、宇栄原小学校の意義は、これを全体的に教科と総合学習と横断的に形づくって、しかもその1、2、3、4あるいは県の環境課の言うところの1、2、3。その教育目標を達成するという全体的な仕組みになっている。それができているので素晴らしいと言っていると、私は安座真さんの話を聞き取りました。ということは、辺土名高校の環境教育はつまり、環境に親しむ、あるいはちょっとだけ環境に負荷を与える仕組みを知る。この部分ぐらいで、結局、全体的な体系がなされていないってところですよ。環境科という名前はあっても、学校もモデル校として指定されているといっても、

結局打ち上げ花火になって、そういう教育のプログラムが体系化されていないという問題があると思いますが、果たしてこれをモデル校の条件とする、こういった全体的な体系を考える宇栄原小学校並みの体系化することを条件とすると、モデル校に指定できる学校があるか。たぶん沖縄にはないでしょうね。安座間さんが言っていたのですが、沖縄でも、全国でもほとんどあり得ないって言っていたのですが、それは宇栄原小学校が特質した意義ではないかな、と思います。さらに細かい話をすれば先生方との関係、先生方の主体性とか、いろいろ問題があると思うのですが、一番大きな問題はこの主体を育成するということに関する教科が無いですよ。中学校から、これ線を入れていますが、実際はもったいない運動、あるいは環境版ISOあそこでやって、あれは極めて限定された社会への働きかけの一例ですが、それからさらに別の分野について社会に働きかける力を、育成する方法があるのかっていったら、無いですよ。それで、我々は沖縄自治研究会で市民性教育っていうことで、社会に本当に働きかける力、社会を変えていく力っていうことをどう育成していけばいいかと、附属中学校で市民性教育の授業をそれで展開しているのですが、これは非常に難しい。既存の社会を持続的な社会へと新しく創りかけていく、社会への働きかけは、言い換えれば既存の社会秩序や社会的規範の変更への提案。あるいは、変更しようっていう協力依頼。あるいは共に働きかけようっていう呼びかけ。拙速で稚拙な提案とか、一人正義を背負い込んだような呼びかけでは、誰も聞いてくれない。聞いてもらえないのですよね。興味・関心を有しない人に対しても話を聞いてもらえるような努力が必要、力が必要。理解を得て賛同してもらえる力が必要になる。そのためには、どんな力を身につけることが、必要があるかですよ。これが非常に大きなテーマになってくる。それで、国全体で法令が制定され、環境教育に関する法令が制定され、教育の内容と方法が指導要綱か何かで確定され、教育委員会で実現に向けて管理され、学校全体で教育目標として受け入れられ、校長が指揮・命令を発揮し、クラスにおいて担任が文科省、もしくは校長の指定通りに指導する体制で、果たしてこんな指導力は身につくのか、といった問題提起ですよ。これが非常にあると思います。横山さんと最後の時にやり合ったのですが、やり合ったって言っても、まあたいしたやり合いでもないのですが、やはり先生達が主体的に話し合っ、環境教育に対して議論をする、議論を重ねる。そういった仕組みがどうしても必要ではないか、先生達が主体的にワークショップの中で環境教育に対して考えていく。そういった力がどうしても必要ではないかということを書いて、私の場合は本当にもうボトムアップで社会を変えていく、ボトムアップで社会を変えていくそのための力を、どう小学生に、中学生に、身につけてもらうか。これが、環境教育の中で実現しないと、環境教育の中だけでなく、本当は教育全体の中で実現しないと新しい社会に創り変えていく力は育たない、というような危機感をもっています。今回それが、新しい社会を創り変えるっていったら非常に大きな、今の社会に対する挑戦みたいな感じになってしまって、非常に大きいのですが、ただ環境に関して負荷を与える今の社会システムそのものがおかしい、という言い方をすれば突破するとして、環境っていうのは突破する素材として非常に重要、やりやすいついていう気がするのです。今、附属中学校で学校の規範に対して、これを変えるっていうことで突破しようとしています。正面突破では極めて厳しい状況がありまして、何回かトライしているのですが、それよりはこういった環境っていうことをテーマにして突破していく、あるいは社会を創り変えていく、そういったことが、環境教育を通して可能ではないかなって非常に大きな期待をしまして、引き続き環境教育について学習していきたいという気持ちでいます。ちょっと長くなりましたが、

以上でこれ私の感想です。参考にしていただけたらと思います。

気づいたこと、それから今日の話でいろいろ指摘されたことで、「いや、こんな、これはこうではなかったか」と、そういった新たな議論がありましたらお願いしたいのですが、そんなに時間無いのですが、是非発言したいという方はお願いします。

大宜見：一つだけ。NPOが4、5年関わって年月が経っても、先生達となかなか親しくなれないと。こう、トップダウンの宇栄原小学校でさえこうだとしたら、他の学校で取り組む場合の、どういう仕掛け方をしている方がいいのかなあと僕らの小学校でやる場合ですね、PTAはやりたがり、校長を抱き込むというか、やっぱり先生達はそれでもなかなか開いてくれないのか。その辺をちょっと知りたいですけどね。

島袋：ゲストスピーカーの方にアドバイスをお願いしたいということだと思んですが、PTAはやる気が満々であると。そして、NPOを巻き込んで、学校の中で環境教育をやっていききたい。その場合に先生方のハードルと言いますか、学校のハードルが非常に高いと。それはどうやって突破していけばいいかということでアドバイスをいただきたいということなのですが、何かお願いできますか。

鹿谷（麻）：私達は、浦添市の港川中学校っていう所で環境教育っていうか、そこも海の観察会とその前後の学習に入ってやっているのですが、そこは浦添の港川や城間の前の海が、いろいろ道路の計画とか埋め立て計画があって、地元の自治会が反対をしているというか、海辺の環境を残してほしいという活動を立ち上げていて、その学校区である港川小学校の子ども達に海辺の環境教育をしてほしいっていう話で実は入っていますが、そこはPTAの方も自治会を通して非常に協力してくれている。それから小学校の中で、やはり海辺の問題に対して非常に問題意識をもってくれる先生がいて、熱心に働きかけをしてくれているので、非常に私達も上手くコミュニケーションがとれている例ですね。校長先生や教頭先生っていうのは学校にいたら「こんにちは」って挨拶するぐらいで、向こうも「よろしく」と言う程度ですが、現場で直接子ども達に接している先生が私達とも非常に密にコミュニケーションをとってくれているというのと、それから実際に観察会やったりする時に、PTAの方達がみんな協力してサポートに入ってくれている、というのは非常にやりやすいですね。ただそれはやっぱり熱心な先生がいるというのと、熱心な地元の自治会長がいるという熱心なキーパーソンがやっぱりいるので、周りはそれに引きずられて、何かやっていることは非常におもしろいので、一緒に参加してくれているっていう状況はあります。そう簡単に、トップダウン型っていうのはたぶんすごく難しいと思っていて、やっぱり現場で動く人で、リーダーとれる人がいるかどうか、っていうのはとっても大事だと思います。

鹿谷（法）：海に行くと子ども達はやっぱり楽しい、地元の人達も楽しい、父兄が来ても楽しい、だから、なしくずし的にどんだんだんだん広がっていつている。なしくずしっていうのは突破口の一つじゃないかとちょっと思ったんですけど。

島袋：宮良さん何かありますか。

宮良：私達のこの取り組みの中で、どんなことをやるかっていうことでやっぱり違うと、あのどういうふうにかで違うと思うのですが。鹿谷さん夫婦のテレビなんかよく見ているのですが、海の観察とか楽しそうですね。動物や生物を見たりとかって、そういうふうな教育の形ですね。でも私達のアースの会でやることは、例えば学校でやっていることを批判したりとかするので。例えば、この前のお話でも言ったのですが、学校の中で、暮らしの中で変えていきましょうっていう私達の取り組みなので、学校でティッシュを持たせるのをやめようとか、食べ残しをやめようとか、気づいたら明るい時は電気つけなくて授業やろうというふうなことを言うので、先生達が気づかなかったとか、先生達がやっぱりヤル気が無かったら、全然効果がないんですよ。なので、ちょっと楽しいことと、暮らしの中でちょっと気づかなきゃできないことの取り組みと、違うかなあっていう感じがある。何でしたっけ、質問。

島袋：環境教育をどう実際に取り入れて、取り入れてもらえるかっていうことと…。

宮良：あっそうですね。だから、私達は4年目ですけど、3年目までは私達も引いていた部分はあるので、今年は先生と仲良くして、飲みに行こうかなって思っています。やっぱり、人間関係が築けないと「先生、こここのところ電気けしましょうよ」とかって言えないところもあるので、仲良くすればいいかなっていうところがあるかなと。どんなにいいこと伝えたって、こんなおぼさんの言っていること聞くか、って思われたらそれでおしまいなので、やはり自分達の態度っていうかな、そういうのも必要かなというふうに思います。

島袋：はい、分かりました。長田さんありますか。特に南風原町のNPOとしては非常に重要だと思うのですが。

長田：なしくずし、いいですね。理念をもってなしくずしていくという高等芸がたぶん必要なのだろうなと思って。僕も去年港川小学校から電話をもらって関わったのは、ゴミの削減プログラムを学校で作るので手伝って言われた時に、同じ先生だと思うんですよ。熱心な先生っていうのはキーパーソンで、やっぱりそれは必要で、適度なトップダウンと適度なボトムアップのバランス感覚、ブレンドが一番いいのだと思いますよ。適度なトップダウンっていうのは、ある意味その港川みたいに頑張っちゃう先生がいたら「うん、うん」っていうふうに許容してしまうのも一種の、肯定的に見ればトップダウンみたいな感じで、せめてそれぐらいのトップダウンがあると、いいブレンドができていけるのかなって感じがしていますね。だから、そういう面で港川は、前の校長先生は何となく頼りない感じだったので慌てて準備して先生方が進めていったんだろうと思うんで、そういうなんか適度なブレンドをどういうふうにつくるか、っていうところがいいかなと。南風原の校長先生は、接していてそのいい意味ではトップダウンの雰囲気はあるかなとは、思っています。あと、先生の中で熱心な、ボトムアップで動く先生を見つけられるか、呼び込めるかっていうところがカギで、そうすればもうかなりの臨界点までいっているんで、それでドカーンといくのではないですかね。僕はその熱心な先生っていうのは、僕自身はまだそんな接してないので分からないですね。少しでも熱心な先生がいたらいいかなという気が。あん

ま答えにはなっていないですけどね。僕は人事権ないので、答えられないです。

島袋：はい、どうもありがとうございました。そろそろ時間なので、終了したいのですが、やはり学校の現場において人と人をつなぐ、特にこういった環境の問題ですとか、社会を創り変えていくという問題意識をもったその人、それを繋げていって、そして学校の中に、人を育てるネットワーク、そしてシステムを創り上げていってけっこう大変なのですが、そういった人に自分達自身もなっていくって意識で、大学においては環境教育やっていく、ということがあればこの授業もそういった意識が醸成されたとすればこの授業も成功ではなかったかなとは思いますが。授業は終わりましたが評価のシートを書いていたかと思っています。最後になりましたが、この授業は、自然環境教育コースの要請を受けて、つくられた「環境教育学」の授業で私はこの授業の専門家ではなくて、前から話していますように政治学の専門です。それで、こういった授業で良かったのかな、っていつも心配しながら進めてきました。自然環境教育コースの本多先生、今日の授業を聞いて一言お願いします。最後に河名先生お願いします。

本多：本来なら、自然環境教育コースの教員がこうした環境教育の実践に関する授業を提供しなければいけなかったが、今まで行われていなかった。また、環境学は自然科学や社会科学等多くの分野から成り立っているが、現在の自然環境教育コースのカリキュラムでは環境経済や環境政策という重要な視点が抜けていた。こうした状況を考えると、今回のように現場で環境教育の実践をしている人たちや政治学の視点を持った先生と一緒に環境教育を考えることは、学生にとって非常に良い機会になったと思う。環境教育に関しては、小さなこと、地道なことでもいいから、何か実践することが現場の教員に求められていると思うが、残念なことにこうした不足している。原因の一つは、環境教育に関していろいろな意見があり、また試行錯誤の段階であるため批判も多く、何かをやろうとすると必ずそれに対する「反発」があるからである。これは特に沖縄県外では顕著である。例えば、生徒を野外に連れ出そうとすれば管理職からストップがかかり、変わった生き物見せればPTAから苦情がきたりすることもある。一方、沖縄は何か新しいことの実践に対する批判も少なく、また外には自然という環境教育には格好の教材もたくさんあり、環境教育を実践するには非常に良いところである。今回の授業経験を活かして、是非沖縄から環境教育の実践を変えていってほしいと思う。

河名：自然環境教育コースの学科主任をしております河名俊男と申します。本日は参加させていただきましてありがとうございます。島袋先生のお話にもありましたように、この授業は、自然環境教育コースの授業として島袋先生にお願いしてありました。そのため、本来は毎回この授業に出席して勉強しなければなりませんでした。私の怠慢と不備で、本日一回きりの参観になってしまいました。大変申し訳ございませんでした。

皆様方のお話をお聞きして、横山先生の学校に参観したり、あるいはNPOの方々のご参加で、いろいろな授業実践があったことを知りました。本来ならばそういう授業にも参加し勉強したかったのですが、本日だけの参加になり、授業の一端を見させていただいたというだけになりました。大変申し訳ありませんでした。

先日、沖縄地理学会で環境教育に関するシンポジウムがありました。そのシンポジウムには、

横山先生や、先ほどお名前がありました安座間先生、それから古我知さん、その他に県庁の方もいらして、いろいろ環境教育についてお話いただきました。私にとりましてはほとんど初めての経験でしたが、現場での環境教育というものについて非常に勉強になりました。特にNPOの方々が学校の現場にいらして、いろいろ説明あるいは指導をなさっていることに感銘を受けました。一方、私自身、大学での環境教育がどの程度できているだろうかと考えてみましたが、非常に不十分な点ばかりが目につきます。自然環境教育コースでは、お隣にいらっしゃいます本多先生の優れた授業実践があります。自然環境教育コース提供科目の中で、「環境教育概論」と「環境教育フィールドワーク」という科目があり、これらは私達のコースの全スタッフで授業を担当しています。

「環境教育概論」は各教員の分野での環境問題あるいは環境教育に関する授業をします。もう一つの「環境教育フィールドワーク」は、野外に出て、学生と一緒に勉強する機会があります。いずれも自然環境教育コースの各教員が分担して授業をしています。私自身は地理学が専門分野ですので、元々外に出ていろいろ見る機会がありました。私自身、元々環境を意識した研究をしてきたのではないのですが、実際に調査をしてみますと、どんどん海岸が埋められてしまったり、貴重な堆積物が海岸の堤防建設で埋まってしまうなどの例がありました。ある時、それらの保全について行政の担当者にお願ひしますと、「そのような地層は沖縄の海岸に行けば、どこにでもあります。」といった返事が返ってきまして、自然環境の保全には熱心ではない例もありました。私自身、そのような体験の中で、自然環境の悪化に心を痛め、それらの保全に対して関心をもつようになりました。

近年の「環境教育フィールドワーク」では、辺野古に行き、地元の方の話を聞いたり、中部の泡瀬の干潟を見たり、あるいは最近では、昨年6月に大規模な地すべりが発生しました中城村の地すべりの現場を見たりしています。現在、私自身はその程度の授業しか出来ていませんが、学生と一緒に、できるだけいろいろの現場を見て、環境の悪化や自然の改変、あるいは環境の保全などについて、学生と一緒に考えたり検討したりしていけたらいいなと思っています。本日は非常に有意義な授業を聞かせていただきましてありがとうございます。特に島袋先生、ありがとうございました。

島袋：はい、どうも河名先生ありがとうございました。結局、環境教育学、あるいは環境教育とは何か、っていうことで、それぞれの方、それぞれの学生みんながいろいろ考えて、そして具体的に実践していくということが必要なのではないのでしょうか。私も書きましたけれども、これは私の今考えている意見で、本多先生はたぶんいろいろ言いたいことがあると先ほどおっしゃっていましたが、各先生方が、やはり教育を通して、それから自分の仕事を通して、生活を通していろいろ取り組んでいくべき問題ではないかなというふうに思います。オープンエンドでこの授業も終わってしまいますが、引き続き、特に環境については自然環境教育コースの学生のみならず、全ての学生が、テーマとして考えていていただきたいと思います。では、これで、長かった半年の授業を全て終わりたいと思います。特にゲストスピーカーの方は、本当にボランティアで来てくださいました。横山さんと古我知さん、それから藤井さんは今日いらしてないのですが、いらしていない方々も含めて、学生のみなさん、拍手でお願いしたいのですが、よろしくお願ひします。どうもありがとうございました。これで終わりたいと思います。